写真家の天野尚さんが撮影し、提供いただきました。12ページに天野さんの写真とコンサートの紹介があります

復刊73号

妙の光（たえのひかり）

蒲原（かんばら）平野の夕日

蒲原平野から見た角田山に沈む夕日。春、一面に水が張られた田植え前の田んぼは海のように見える。実際その昔は海で、角田山は半島のように日本海に突き出していた。やがて信濃川が運ぶ土砂で蒲（がま）の原ができ、そして沼のような田んぼが、大規模な排水施設の完備で現在の穀倉地帯となった。

人々の定住は山の麓から始まり、平野へと広がる。古くからこの山はシンボルであり、夕日で空が黄金色に染まり西方浄土を思わせる光景に、人々は手を合わせて暮らしてきた。角田山から弥彦山にかけて宗教的聖地と言われた所以である。夕日の下、山の向こう側あたりに妙光寺がある。

通巻93号　復刊73号　2011年3月5日(季刊)　角田山妙光寺　発行　〒953-0011 新潟市西蒲区角田浜1056 TEL 0256-77-2025

行事案内

春のお彼岸中日法要

3月21日（祭日）

午前10時半　安穏廟法要

11時　春季彼岸会法要　於 本堂

12時　おとき

（どなたでも当日受付でお申込下さい）

午後 1時　法話　住職　於 大広間

お彼岸は春秋二回、陽気もよくなり昼夜の時間が同じになるこの日、心の偏りをなくして仏様の教えを修行しましょうという古くからの行事です。ゆっくりお参りいただき、気心知れた皆さんで当番手作りのおときをいただけます。お誘いあわせお出かけ下さい。

春の一日研修

4月10日（日）

午前9時～午後3時半

会費4千円

受付締切4月5日　詳細は9ページに

ご判さま

4月4月29日（祭日）

午前8時半受付開始　詳細は別紙で

月例信行会　毎月第一日曜

午前7時30分～9時

お参り、法話、作務、朝粥の朝食、コーヒータイム

会費千円　予約申込不要

月例ボランテラ　毎月15日

午前9時～11時半　　午後1時～3時半

雨天時は内部の清掃　昼食ご持参願います

あとがき

10年余り使用してきた印刷機が壊れて入れ替えの必要に迫られ、白黒の印刷機でも高価なので、少々無理してカラー機にしました。この寺報は製本等があるので引き続き印刷屋さんに白黒でお願いしますが、この機会に版を大きくしました。初回なのでレイアウトをボランティアでデザイナーの加茂香代子さんが、センスある腕を発揮、如何でしょう。ご家庭の若い世代にも読んで欲しいと願っているのですが。　小川

聖なる山と妙光寺

小川英爾

山号の由来の謎

妙光寺は新潟市の中心部から海岸線に沿って南西に25キロ程、角田山の麓に建つ。正和2年（1313）創健の記録があるので、2年後の2013年に開創以来700年を迎える。古い歴史と言われるが、同じ村内の浄土真宗の寺は千年以上経つなど、近隣には他にも古い寺が多い。特に角田山から弥彦山、国上山（良寛さんが晩年住んだ五合庵がある）にかけての角田・弥彦山周辺は、古墳も発見されるなど古代から人の住んだ歴史があり、宗教的にも興味深い話が沢山残る。

正式には角田山妙光寺というその名の由来にも謎がある。寺は山号といって寺名の上に山の名前が付くのが慣わしで、これは中国では寺が山中にあったことに由来する。では角田山の周囲には妙光寺より古い寺も多いのに、なぜ妙光寺がこの土地のシンボルとも言える角田山の山号を持つのか。

岩屋の七つ頭大蛇伝説と修験道

妙光寺の裏手に〝岩屋〟と呼ぶ大きな洞窟がある。文永8（1271）年10月、佐渡島流しの日蓮聖人は寺泊から船出されたが、悪天候で角田浜海岸に漂着された。そのとき現れた老翁から「近くの洞窟に七つの頭を持つ大蛇が住むので『法華経』のお力で退治して欲しい」と願われた。日蓮聖人によって教化された大蛇は、「この後は法華経の信者をお守りします」と、現在の山梨県身延山久遠寺の裏手にある七面山に移り棲んだといい伝わる。この岩屋の前一帯は〝ボウクボウ〟と呼ばれ、その昔は寺が幾つもあったと言われるところから、坊（小さな寺）が九つあった〝坊九坊〟ではないかと歴史家は言う。そこで私は日蓮聖人に教化されたのは七つ頭の大蛇ではなく、日蓮聖人に法論で負けた七人の修験道の山伏ではないかと想像する。

なぜ山伏か。この岩屋の奥は国上山にある真言宗国上寺の本堂裏手に今も開いている風穴に通じ、岩屋の焚き火の煙が出てきたとか、追い込んだ犬が出てきたという伝説が双方に残っている。この国上寺は越後一の古刹としてかつて修験道の中心道場であり、弥彦神社とも深い繋がりがあった。その昔寺と神社は一体だったのが、明治政府は寺と神社を分離して寺を激しく弾圧する仏教廃止政策（廃仏毀釈）をとった。中でも仏教と神道が密接に混じった修験道は壊滅的にやられ、県内でも八海山などにその痕跡が残るのみだ。

岩屋

日印上人像・妙光寺蔵

妙光寺は日蓮聖人が亡くなられて33年目に、孫弟子の日印上人が開いて3人の弟子にそれぞれ妙法寺（これが改名して現在の妙光寺）、蓮華寺（現在新発田市の蓮昌寺）、経王寺（現在は村上市）を継がせた。この3人が元は国上寺の弟子だったと伝わっている。国上寺の山伏が角田山を始めこの山々を修行の地として縦横に歩き、なかでも角田山にゆかりの深い山伏が日蓮聖人か後の誰かに出あい、妙光寺の創建につながり山号となったのではないか。七つ頭の大蛇伝説もこうした中から生まれてきたと想像している。

開山日印上人と聖地・石瀬

角田山と弥彦山の間に多宝山という山がある。この麓が温泉地で知られる岩室。この石瀬は岩室の聖地と言われるほど古刹が並び、なかでも種月寺は曹洞宗越後四大道場の一つに数えられ、最近改修された本堂は国の重要文化財に指定されている。天保8年（736）の開創という、さらに歴史の古いのが真言宗青竜寺。妙光寺を開いた日蓮聖人の孫弟子の日印上人はこの寺の小僧だった。佐渡島の日蓮聖人を訪ねる弟子の日朗上人が青竜寺に泊まり、仏様が夢枕に現れて眼をさますとこの小僧が足元に控えていた。利発そうであり鎌倉に連れ帰り弟子にしたという。長じて日印上人はやがて郷里に戻り、節分の鬼踊りで知られる三条市の法華宗総本山本成寺をはじめ、日蓮聖人ゆかりの地に妙光寺他を開かれた。

その多宝山は以前は十宝山と書いた。岩室と反対の海側には銅山跡があり元禄時代に盛んに採掘された。ここには宝川が流れ、また銀山や金池などの地名も残るなど、まさに宝の山である。全国各地に残る修験道の修行の山はこうした鉱物資源が豊富で、山伏は山師にも通じるというのが通説である。麓の石瀬の寺も廃仏毀釈で修験道は跡形も無いが、往時はその拠点だったと考えられている。こうしたことからも、角田山、多宝山、弥彦山、国上山の連山はその昔修験道の山伏が活発に修行する霊山であったことが容易に想像される。

この山々は今も昔もその東に広がる蒲原の平野から、西に沈む夕日で茜色、あるいは黄金色に染まる風景が印象的だ。ここから昔の人々は西方浄土、極楽の世界をイメー

弥彦神社の祭神が上陸されたとされる米津浦

ジし、石瀬もその聖地のひとつだと東側の各地にいい伝わる。明治以前は弥彦神社も仏教と一体だったから、神社と極楽浄土が一緒に扱われても違和感は無い。また数年前、新潟市に住む高齢女性から「夕方部屋の窓から遠くに見える角田山を眺めて、あの辺りに妙光寺さんがあるんだ、そこに主人が眠っている、そう思って拝んでいます」と書かれた手紙を戴いた。今も昔も人の気持ちは変わらない。

古来からのシンボルを歩く

この角田山と弥彦山を西側、日本海の海上や佐渡島から眺めると、洋上に浮かぶ二つの島に見える。古代に海上を移動した人々からは大きな目印となったことは想像に難くない。角田山周辺だけでも140もの遺跡が発見され、また弥彦神社の神様が海からやって来て上陸されたという場所があるなど、古くから海沿いに人が到来したといわれる。さらには角田浜の隣村、越前浜は越前の国から戦禍を逃れた村ごとの移住者だし、原発計画で消えた角海浜も元は能登の門前町がそのルーツだ。また国上山の海側の野積集落はやはり能登から移住し、酒造りの文化を持ってきたから今も杜氏が多く新潟の酒造りを支えて来た。

さらに弥彦神社の神様は片目で鍛冶屋の神様と言われた時代があって、山伏の鉱物資源の話と共通する。またこの弥彦神社と国上寺との深い繋がりなど、古来から宗教的聖地としての角田・弥彦山を物語る話はきりが無い。最近は山野草ばかりが関心を引き、こうした古い話が忘れられているのが気になっていた。

この山々を昔の山伏のように縦走してみたいと考え、関心を持つ美術評論家で新潟市の大倉さんをお誘いし、昨年4月早々に国上山から登った。この季節には珍しく山頂に雪が残る弥彦山で難渋しながら、夕方になったため多宝山で石瀬に下山。雨交じりの雪にも見舞われたが、日本海と蒲原平野を左右に眺めながら山伏の気分を少し味わった。この春に残りの多宝山から角田山までを歩く予定でいる。前回のように道が整備されているのか、それともヤブをかき分けて歩く修行の道になるのか。

国上山登山道の入口に立つ鳥居も神仏習合のなごり

信心

毎月のように寺参り

新潟市西区 小林 清(66歳)・昌子(65歳)さん

二人は定時制高校で放送部の先輩と後輩だった。その頃から交際が始まり、清さんが卒業後地元企業に就職、東京支店に配属されたので以降は文通を続けた。昌子さんは末っ子だったが兄姉が家を離れ、清さんは末っ子の六男。必然的に婿入りとなって、清さんが25歳のとき新潟に戻り結婚した。

兄姉が多い清さんの実家は貧しく「親には何事にも一生懸命になれ。人様には迷惑をかけるなと言われて育ちました」と。転属した系列の会社でも懸命に働き、共働きで3人の子どもは同居の両親が世話をした。40代後半で管理職に就いた清さんが社内の人事問題に悩み、出社拒否状態からついにはひとり家を出て、自殺を考えながら1ヶ月半放浪を続けた。当時入院していた母親がことのほか心配し、ようやく連絡が取れた暮れの12月、昌子さんが広島まで迎えに行った。「あの頃は本当に色んなことがあって、大変だったね」と昌子さん。

その後親戚の引き合いもあって高速道路の料金徴収の仕事に就いた。そこでも懸命に努め、正社員から業務部長になった。しかし仕事上のミスが2回続き、任期を残して63歳で身を引いた。実は清さんには40代から手術でも治せない遺伝性の難聴があり、それが話の行き違いを生むミスの原因なのだ。今は清さんが趣味の写真とパソコンと料理、昌子さんはフォークダンス、コーラス、折り紙、さらに二人でスクエアダンスに夢中の毎日を送る。

住まいのある町には昔から妙光寺を含めた3つのお寺の檀家が混在している。以前にはその20軒で〝講〟という集まりを月ごとに各家持ち回りで開き、お経を読み、お茶を飲んだり、時には日帰りで温泉にも行った。両親が熱心だったこともあり、家が会場になれば二人は準備やお茶出しを手伝った。時には親に代わって飲み会にも出たことで、実家が浄土真宗だった清さんもすっかり日蓮宗に馴染み、お経も読める。その講は若い世代に繋がらず先ごろ解散した。

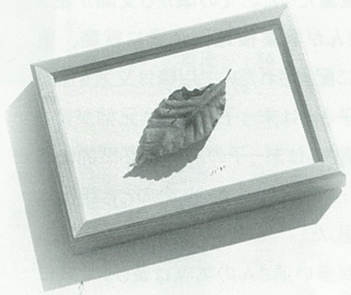
中国・天台山参拝で蘇州にて

退職してからは妙光寺の研修会に二人で参加したり、昨年の中国・天台山団体参拝にも行った。毎月の朝の信行会や暮れの落ち葉掃きにも出たから、月1回以上は通ったことになる。「頭が悪くても誠実にやっていれば、必ず誰かが見ていてくれるものです。なぜお寺の役に立ちたいか、自分でも不思議ですがよく分からないんです」と清さん。「夫の実家の菩提寺、母の実家の菩提寺どちらもお盆に墓参りしても本堂でさえ閉まっています。妙光寺はいつもカラッと開いてとてもオープンな感じで、つい行きたくなるんです。10年ほど前の身延山参拝旅行では七面山にも登りました。この秋にも参加してもう一度登りたいけどどうかなあ」と昌子さん。

8月のフェスティバルには15年以上も毎年参加して、親しくなった県外の方を自宅に招いたこともある。清さんが通った『オヤジの料理教室』の主宰者が、安穏会員だったことを後で知って驚いたなんて話も。

角田山妙光寺インフォメーション

秋の落ち葉掃き



秋から冬の境内は落ち葉で埋まります。一度に葉が散らないので、落ち葉掃きは何日もかかります。これに数名の方々が相互に連絡を取り合い、天気の良い日に数日間かけてきれいにしていただきました。本当に助かりました。お礼申しあげます。

暮れの総供養会

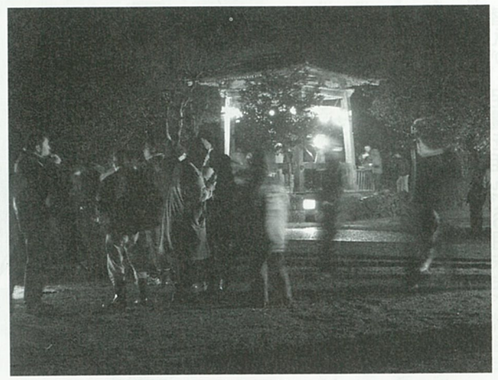
都合で法事ができなかった方のために暮れの12月21日本堂で合同の供養会を催し、5軒23人が参加されました。その中お一人の新潟市西区Iさんから丁重なお葉書をいただきました。

「今日の年回忌法要に参加させていただき、総供養ということで質素かなと思っていましたがとんでもないことでした。短い時間に何の無駄もなく、さりとて急いでいるわけでもない。しっかりとした心のこもった祭典が出来、とてもいい時間を過ごさせてもらいました。この正月はご住職の法話での言葉を思い出すことでしょう。さりげない語り口調に心癒され家路に着きました。ありがとうございました。お礼まで。」

年末年始の賑わい

昨年末から今年の正月は天気が良く、除夜の鐘に200人余りが集まりました。寒い中1時間半も鐘の下でお手伝いをしてくださる、檀徒の夏目さんと親戚の内藤さんが「20年以上この役をさせてもらっているけど、今年聞いた小学生の男の子が撞いたときの音ほど心に響いたことはなかった。こんなこと初めてだ。力任せでなく、澄んだ心で撞くのが大事なことがよくわかった。それに今年は例年になく若い人が沢山来てくれたね」と、全て終了して暖を取っているときの話が印象的です。

確かに、明けた正月の2日間も、家族揃っての年始参りの方が増えました。「お婿さんが来ました」「お嫁さんが来ました」「子どもが生まれました」そんな方々で、一時は大広間が一杯になるほどの賑やかな正月でした。混雑して十分なおもてなしが出来ずに申し訳ありませんでした。



除夜の鐘

角田地区　冬の信行会

地元の角田浜地区では以前から続く〝講〟と呼ぶ檀徒の集まりが高齢化してきたので、次世代の人たちで冬に数日集まりお経の練習や意味について研修しています。5年目になった今年も1月末から週末に集まり、3回目の終了後は懇親会で夜遅くまで盛り上がりました。同様の会を他地区でも計画しましたが、都合で開催には至りませんでした。

お経の説明を聞く

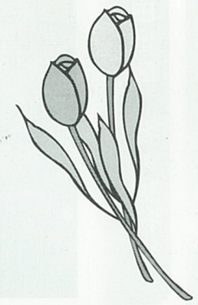
参道工事

以前からお知らせの入口参道の舗装工事に着手します。市道から入って池の上安穏廟入り口までです。3月1日～4月20日までが予定工事期間です。期間中は業者に安全な誘導をお願いしますが、通行にはくれぐれもご注意とご協力お願いします。

完成すると幅4mの道路に1mの歩道がつきます。現在でもかなりの速度で入ってくる車があって危険を感じることがあるのですが、整備されるとさらにその心配が増します。そこで道路の中間4箇所で部分的に石を張って、弱い衝撃で速度を落としてもらいます。敷石ですから参道としての景観も整います。

両側の桜並木の計画は予算の半分しか寄付金が集まっていません。後日土盛りだけでも先行して実施するかどうか、検討中です。

角田山妙光寺インフォメーション



建物補修工事

本堂を建替えて10年目を迎えるので、積み立ててきた資金で補修工事に入りました。正月に間に合わせて男性トイレ床の改修と、玄関式台の幅を広げて新しくしました。3月からは客殿の鉄骨の錆落としとペンキ塗り替え。引き続いて本堂と回廊の外壁を保護する塗装の塗り替えが、足場を組んで6月末まで続きます。工事期間中は駐車場に仮設の作業小屋が設置されます。工事中も参拝には支障の無いよう十分な配慮をお願いしてありますが、念のため足元にご注意下さい。

結婚式予約2組

今年は仏前結婚式の予約が2組入っています。会員で事務をお願いしている柿崎さんのお嬢さんが、「花嫁姿でお墓のお父さんに報告したい」と5月に。お相手は近くの高校のホッケー指導者で、学生のトレーニングや試合前に妙光寺へお参りに来ていたという偶然もありました。

8月はニューヨーク在住でデザイナーの遠藤さん。海外で活躍する県人として、昨年新潟日報の紙面と新潟放送テレビでも紹介されました。実家が妙光寺檀徒で、いずれは子供時代を過ごした五ヶ浜に戻りたいという男性です。お相手が高校時代の同級生で親戚も皆新潟だし、二人で雰囲気が一番気に入った妙光寺に一致したそうです。

結婚式はこれまでにも何組かあり、最近は3年前にアメリカに住む住職の姪がアメリカ人男性と挙式、昨年赤ちゃんも生まれました。式では雅楽の生演奏と、五色の花びらの散華がきれいです。他に近々予定のある方はいらっしゃいませんか。

2007年秋の仏前結婚式

ご判さま、稚児募集

4.29

300年は続いていると言われる妙光寺の伝統行事〝ご判さま〟を4月29日に催します。日蓮聖人が島流しの佐渡から鎌倉に戻られる際、警護の役人にこれまでお世話になったことを感謝し、来世での再開を約束して渡されたご判（印鑑）があります。これをご開帳したのが始まりです。

昔から「降っている雨も止む」と言われた、雅楽を先頭に境内を練り歩く稚児と輿の行列は、満開の八重桜の彩りと重なって華やかで厳かです。昼のお斉にいなり寿司の用意もあります。どなたでも気軽にお出かけ下さい。

今年のお手伝い当番は巻・割前地区、のぼり立てと当日の輿担ぎに角田地区の皆さんよろしくお願いします。

回向・祈願申込のご案内

ご判さまの志納袋を檀信徒にお届けします。当日10時までにお参りに併せてお持ちいただくか、世話人経由または郵送等で事前にお届け下さい。「家内安全」や「身体健全」等の祈願と特別回向は、午前11時の大法要で読み上げして、お札を差し上げます（遠方の方は郵送）。施餓鬼塔婆は午後1時半の法要に塔婆を立ててご供養します。

お稚児さん募集

お練り（行列）と大法要に出仕するお稚児さんを募集します。4～6歳位の男女。衣装一式はありますので、当日に白足袋と参加費5千円をご用意下さい。法要の後に「発育健全」のお加持をして、お札、記念品、記念写真、昼食が付きます。付き添いの服装等詳しくは直接お知らせします。尚今年は既に定員を超す申込があり、これからお申込の方は貸衣装になりますが、費用は変わりません

春の一日研修

お経を読んでみたい、少しは意味が知りたいという方。数珠の持ち方からお参りの作法まで、桜の季節に一日お寺で修行しませんか。椅子席もあり、堅苦しいことは一切ありませんので、気軽に参加いただけます。回を重ねた方には繰り返し、さらに上のコースもあります。昨年は春秋各回30人ほどが参加されました。

期　日：4月10日（日）午前9時～午後3時30分。
対　象：檀信徒　安穏会員
費　用：昼食付き　4千円
申込と締切：4月5日までに電話、はがき、FAX、ホームページ連絡窓口等から
前　泊：県外等遠方の方は妙光寺で前泊できます。

再開

月例信行会にお出かけください

冬の間休止していた毎月の月例信行会を3月から再開します。毎月第一日曜朝7時00分から本堂で法要と法話。境内で簡単な作務（掃除等）を30分。朝粥を食べて9時頃終了。あとはコーヒータイム。どなたでも当日直接お出かけいただき、会費千円をお賽銭箱に入れていただいて参加できます。

夏前は3月6日、4月3日、5月1日、6月5日、7月3日となります。気軽にお出かけ下さい

月例ボランテラのお願い

一昨年より秋から冬の落ち葉掃きをお手伝いをいただき、昨年12月も延べにして30人ほどが参加されました。これをボランテアならぬボランテラと言ってますが、とても助かっています。その中から「草取りもあるし毎月定例にして、都合のつく方がいい時間に参加してもらうようにしてはどうか」というありがたい声をいただきました。

そこで取り合えず次のように計画しました。**3月から12月の毎月15日。午前9時～11時半。午後1時～3時。**動きやすい作業用服装と軍手。人数が読めないので昼食は各自持参でお願いします。お汁、お茶等は用意あります。秋から冬の落ち葉掃きは特に人手が要るので別枠で日を設定します。

どなたでも気軽にお手伝い願えれば大変ありがたいことです。宜しくお願いします。

落ち葉焚きでやきいもを

身延山・七面山　団体参拝募集

総本山身延山久遠寺と七面山登詣の団体参拝を行います。今年はソウル花祭りツアーのため予定しなかったのですが、希望者があり急きょ計画しました。今回は七面山登詣で健脚向けに『身延山奥の院思親閣』を経由するコースを初めて設けます。

日程の都合で**10月8、9、10日**で連休と重なっています。勤務があってこれまで参加できなかった方も、この機会にぜひどうぞ。

安穏廟

カラーパンフを作成しました

『安穏廟』は妙光寺の宗教活動の一環です。そのため行政指導で広告やテレビCMなど、宣伝は一切してはいけないことになっています。それでも申し込みが多いのは各種マスコミで紹介されるのと、皆さんが紹介くださる口コミのおかげです。

そんななかで、知人や離れている家族に説明するのに資料が欲しいと言う声を多数いただきます。ホームページでは直近の様子を常時カラーで見ることができるのですが、パソコンが必要です。そこで最近の妙光寺の様子を印刷物にして、皆さんにお届けします。もっと欲しいという方は枚数をお知らせください。差し上げます。

日蓮宗DVDをお届け

日蓮宗を紹介するDVDができました。

講談師の国本武春さんが説明役で、とても親しみやすく分かりやすい内容です。全編30分余りです。全檀信徒にお届けしますのでぜひご覧下さい。安穏会員でも希望者には差し上げますのでお申出ください。

ソウル花祭りツアー満席

韓国ソウルでお釈迦様の誕生日をお祝いする〝花祭り〟に参加するツアーをご案内しました。

お蔭様で新潟空港、成田空港の両発着とも満席となりました。ご協力お礼申しあげます。

募集！

送り盆に出店しませんか

夏の送り盆では500人ほど集まる境内に小さな出店があります。今年は野菜や手作りの品などを並べて出品される方を募集します。午前11時から夕方5時まで、畳1枚の広さをテントの下に並べてご自身で店番のできる方。詳しくはお問合せ下さい。

年間予定

その他の今年の主な行事予定日です。

3月21日（祭）　春季彼岸会
8月　1日（月）　盆参（墓参り、施餓鬼法要）
8月19日（金）　岩屋七面様祭礼
8月27日（土）　送り盆（第22回フェスティバル安穏）
今年は韓国から『円光大学伝統公演芸術学科のビオトルム伝統公演芸術団』4名が来日し、伝統的な音楽を現代に再生した〝サムルノリ〟の演奏が決定。
9月23日（祭）　秋季彼岸会
10月23日（日）　お会式・第10回生前法号授与式

風景写真とソプラノコンサート

新潟日報社や新潟放送等が主催し、ソプラノの歌声に合わせて写真家・天野尚さんのアマゾンと佐渡島の風景写真を、大型スクリーンで見る催しが新潟市で開催されます。そもそもは、東京在住のソプラノ歌手2名から響きのいい妙光寺の本堂で歌いたいと、相談を受けのがきっかけでした。そこで住職が友人の天野さんに持ちかけて写真を借り、映像とソプラノのコンサートを一昨年５月に妙光寺本堂で開いたのです。

これが大変好評で、テレビ放映されたのを見た佐渡島の人たちが佐渡でもやりたいとなりました。しかし当日の悪天候で船が欠航し、開催したものの他のゲストが出演できませんでした。そこでぜひ新潟でと今回の開催になりました。ご縁といしか言いようがありません。美しい歌声と雄大な大自然が大型スクリーンに映る様子は圧巻です。

風景写真とソプラノのコラボレーション

「大自然からのメッセージ」

◆日　時：4月1日(金)19時開演
◆会　場：りゅーとぴあ・新潟市民芸術文化会館劇場
◆金　額：前売1,500円
◆主　催：一般社団法人世界環境写真家協会・新潟市他
◆問合せ：世界環境写真家協会　TEL 0256-72-1082

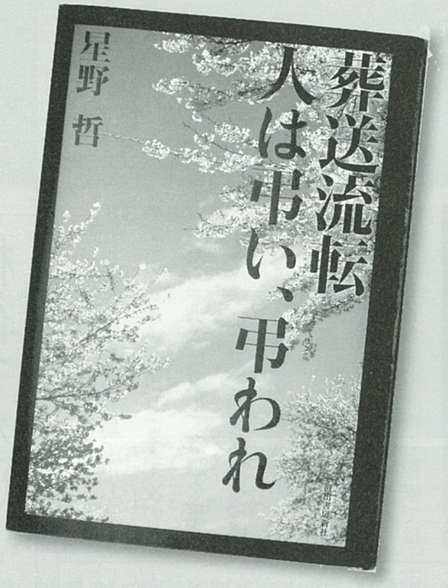
同時開催

「世界環境写真展」

同会場で3月23日～4月7日まで開催

壮大で手つかずの自然や破壊の危機に瀕した自然等々、世界の第一線で活躍する写真家たちの作品が多数展示されます。入場料300円。

おすすめの本



『葬送流転　人は弔い、弔われ』

星野哲・著

河出書房新社　定価 1,500円(税別)

朝日新聞の〝ニッポン人脈記〟2010年4月2日から10回連載の記事をもとに全面的に書き下ろしたものです。孤立死の現場から病院や葬儀社のルポ、おくりびと、散骨、永代供養墓…、妙光寺も詳しく紹介されています。新聞記者として葬送の変化を20年見続けてきた著者は「墓や葬儀は人と人の絆、つながりが色濃く反映される。葬送の変化は人間関係の変化だ」とまえがきで語っています。ドキュメントタッチの文章にぐいぐい引き込まれ、読んでいて目頭が熱くなることも。妙光寺受付でも販売中。

子供向絵本

『たいようまで　のぼった　コンドル』

乾　千恵・文

福音館書店　定価 410円

書家でエッセイストでもある乾千恵さんは体に障がいがあります。不自由な体で憧れのペルーに旅して、アンデスの厳しい自然の中に生きる少女と一羽のコンドルの愛を絵本にしました。乾さんには2007年に妙光寺で書の展示とお話をしていただきました。また乾さんのお母さんが40年前の冬、妙光寺に滞在して先代住職夫妻の世話になったことが生涯忘れられない思い出とのこと。偶然だったのですが、その奇縁を知ってお互いが驚きました。この本を今年のご判さまでお稚児さんの記念品にします。

妙光寺でお話された千恵さんとお母さん

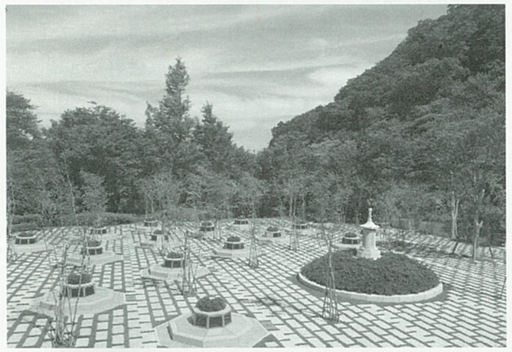
あんのんのページ

檀徒でないと…

安穏廟はどなたでも受付していますが、原則として葬儀は檀徒にならないとお受けしませんとお伝えしています。法事、埋葬等はお受けしています。妙光寺は檀家ではなく檀徒といいます。

妙光寺では皆さんに檀徒になっていただきたい気持ちはありますが、安穏廟を申し込む際の条件にはしない。お付き合いをして納得したら自分の意思で申込んでください、というのが趣旨です。そのためにはいつでもオープンにしてご相談も受けるし、妙光寺からお伝えしたいことも沢山あるので心を開いて拒絶しないでくださいとお願いしています。

そのとき「自分や我々夫婦はいいが、跡継ぎがいない」とか「子どもに強制したくないが…」という質問が多くあります。跡継ぎに関係なく、ご本人が個人の立場で申し込むのですからその代限りです。次の代がいたらその方に改めて意思を確認します。これが家で継承する〝檀家〟と違い、個人なので〝檀徒〟といいます、とお応えします。そもそも戦後は〝家〟の考え方が消えて、法律上も各お寺の規則も檀家ではなく檀徒になっています。



当然のことですが、日時を予約できないのが葬儀です。それでも万難を排しお互いが日程を調整して執り行います。住職が出かける朝連絡があり、どうにもならなくて韓国に日帰りしたこともあります。空港で県外の方から連絡を受け、飛行機の離陸直前まで調整して近くの寺の後輩住職に代理をお願いしたこともあります。お寺の事情ばかりではありません。故人に生前から頼まれていたお通夜に伺ったら、親戚から「本家と違うお寺だ」「本家と違う宗派だ」と言われて遺族が困惑したことがあります。これが遺産を巡るトラブルの口実にされたこともありました。

「檀徒を申し込む前に急変して亡くなったのですが、葬儀を」というお申出は何回もあります。その際、親戚のことなどを十分確認した上で都合のつく限りお受けしています。しかし事前に事情を承知しているのと突然依頼されるのとでは、こちらの対応に時間もかかり、住職が取り込んでいたりで出先だったりすると尚更です。こうした背景から〝原則として葬儀は予め申込まれた檀徒だけ〟ということなのです。先日も急なご依頼があり、こちらの説明不足でお応えできず誠に申し訳ないことをしました。

他にも、親戚筋が…お布施は…戒名料は…寄付は…と言うご質問も沢山あります。お気軽にご相談下さい。檀徒になるのはお申し出いただければいつでもお受けしています。強制することは一切ありません。

寺庭から

「笑い飛ばす・そして希望」

小川なぎさ

正月が終わると寺のスタッフの表情が少し和らぐ。寒い冬は大きな行事がなく時間に追われる事が無いし、この時期にまとまった休暇を取ることにしているからだ。一方でこの暇なときにこそ頭を使うべき!とばかりにすでに4月のごはんさま、8月の送り盆の準備も進められているのだが。

私自身も研修会や、旅にでて見聞をひろめたり、雪が降り続くのを眺めながら昼寝をして体力の温存に努めた（笑）。これで春からたぶんバッチリだと思う。ところが昼寝をしすぎたのか先行き不安な気持ちが湧いてきた。自分の考えとはお構いなしに、脳みその反応が衰えてきたと思われる行動があって、これは多分自然な老化現象なのだと理解はしても、もう時間がないのかも知れないというあせりの気持ちだ。

自分で言うのもなんだが、私は好奇心が旺盛で知らないことや、新しいことを見たり聞いたりするのが大好きだ。だから気持ちが落ち着かず、一つのことを極めるということが苦手だし飽きっぽい。ついそのために、今まで一番長く続けられたのはこの結婚生活だという笑い話をしてしまう。あと余命が三十年として、一つくらいは結婚以外の自分のための世界をと思いながらもここまできてしまった。

もう少し若いときは人や社会のためになる活動を!ということもあったが、おそらく性格的に合わないので、これからは自分が楽しく生きてゆくという方針に変更した。これも冬籠りの間に考えたことで、この一年は好きなことをしてみようと思いついた。あと一歩踏み出せば実現可能な計画、たとえ妄想のようなものだとしても、それは繰り返す日常の中での希望となる。

先日角田地区の若手でお経練習会の打ち上げとして、寺の台所で飲み会をした。窓ガラスが割れそうなほどにぎやかで笑いにあふれる楽しい時間だった。深刻な悩みも大勢にかかれば笑い飛ばしてハイおしまい！はちゃめちゃで、なにがなんだかわからないうちに終わったのだけれど、翌日はさっぱりした気分だった。寺を媒体とした関係だから、友人といっては失礼なのかもしれないが、長い年月を歩んできた旧友のような親しい人たち、酒が強くて楽しい人たち、笑うってことは大切なことなんだね。そんなひとときをありがとうございました。

寺は楽しくて、行事には美味しいものを食べられて、お経を読んだり、大切な人にお参りしたり、帰るときにはさっぱりと良い気分で帰ることができる、そんな場所になるのが大切なことかも知れないと思う。

おしらせです。

今年も行事は盛りだくさんご用意してます。入場はお気持ちで・…ではありますが、定員はありません。おときという食事も質素で美味しい献立をあれこれ考えています。お気軽にお出かけください。